

あなたと 博物館

No. 245

2023.09.15

特集：松本市立博物館開館記念特別展
まつもと博覧会



Matsumoto City Museum

松本市立博物館開館記念特別展 まつもと博覧会

2023.
10.07 sat
▼
12.10 sun

今年からちょうど150年前に開催された「松本博覧会」。この博覧会は、取り壊し寸前だった松本城を博覧会場として活用することでその危機から救いました。

本展覧会では、松本城を危機から救った面が注目される博覧会の実像、人々の“啓蒙”や地域の“開化”、“勸業”といった「松本博覧会」の多様な姿を探ります。

また、第4章では、まちとの交流を通してまちづくりに貢献することを目指す博物館が考える、知を開く取り組み「EXPO MATSUMOTO」を展示の中で展開します。今の松本の技術力、創造性などを発信し、地域の魅力の再発見を目指します。

郷土松本を担う人をつくる“ひとづくり”、心豊かな夢がふくらみ育つまちをつくる“まちづくり”の実現を目的とする、新しい博物館の取組にご期待ください。

はじめに

松本博覧会が開催された明治初期は、全国的に博覧会ブームであり、各地域で地方博覧会が数多く開催されました。その中でも、松本を含む筑摩県では、全国的にみても博覧会が盛んに開催されました。

松本博覧会は、当時下横田町の副戸長であった市川量造らが、有志を募り松本博覧会社を設立し、松本城を会場として借り受け開催されました。第1回目は、明治6年(1873)11月10日から12月24日まで開催され、県内外から古器旧物を中心として展示品が収集されました。当時の新聞である「信飛新聞」では、1日に4,000～5,000人が来場し、未曾有のにぎわいであったことを報じています。その後、筑摩県時代に松本城を会場に5回の博覧会が行われました。

第1章

松本博覧会前史 ～博覧会との出会い～

「海外博覧会ノ盛ナル言ヲ待タズ近頃都下博覧会行レテ人々開知ノ益少ナカラズ…」これは、市川量造が松本博覧会開催を県へ願い出た建言の書出しです。海外や都会で開催された博覧会を意識し、松本でも海外や大都市に並ぶ博覧会を開催したいという意気込みを示す内容となっています。

市川量造が目指した博覧会とはどのようなものだったのでしょうか。第1章では、海外で開催された万国博覧会と大都市で開催された博覧会について紹介します。



元昌平坂聖堂二於テ博覧会図(飯田市立美術博物館所蔵)

第2章 松本博覧会
～博覧会の開催と松本の文明開化～

松本博覧会は、県の全面的な協力とそれを担う地域の“名望家”によって盛んに行われ、地域の人々の啓蒙と文明開化に貢献しました。

第2章では、松本博覧会の開催の経緯や内容を明らかにし、さらに“市川量造”と松本の文明開化事業を紹介し、博覧会を担った人々の思いに迫ります。



筑摩県博覧会錦絵



ガラ紡(安曇野市教育委員会所蔵)

第3章 変わる博覧会～開化から勸業へ～

明治10年(1877)の内国勸業博覧会開催により、博覧会は松本博覧会のような古器旧物を主に展示し、人々の開化を目的としたものから、国内の産業振興を目的とするものへと変化していきました。

第3章では、内国勸業博覧会と松本の関わりについて展示します。

第4章 EXPO MATSUMOTO
～松本発のものたち～

松本博覧会には、古器旧物だけでなく県内産の特産品も集められ、地域の特性や魅力を発信する役割を担いました。

第4章では、明治の博覧会を基に今の松本を知る博覧会を開催します。松本をフィールドに生産・活動を行う企業や作家などの出品を展示し、松本で生み出される特徴ある製品やものづくりを紹介します。



没入型映像体験イメージ図 セイコーエプソン株式会社 出展

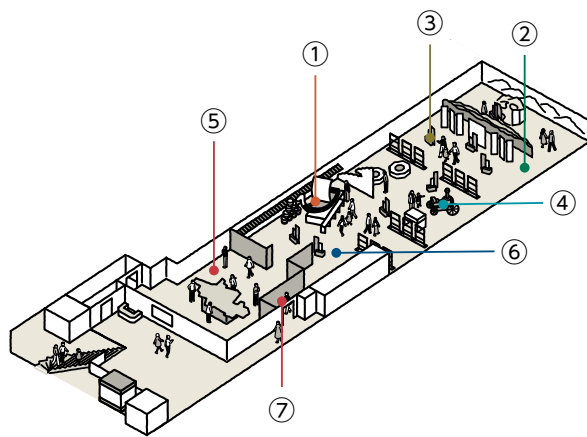
いよいよ新しい博物館が開館します。ぜひご来館いただき、本展覧会を通じて新しい博物館のこれからを感じてもらえれば幸いです。

(松本市立博物館 学芸員/原澤 知也)

新松本市立博物館 常設展示資料紹介

いよいよ今年10月7日にオープンを迎える新松本市立博物館。今回は、博物館3階の常設展示室で見られる資料の一部を一足先にご紹介します。旧博物館での展示内容を見直し、新たに顔を出す資料、修復・復元を経てかつての姿に蘇った資料、さまざまな資料たちが皆様のご来館をお待ちしています。

また、一部の展示コーナーでは、展示内容を定期的に更新するものもあります。「何度でも来たくなる」常設展示室を目指していきます。



にぎわう商都

①初市の宝船と七福神

宝船は、松本城下町の本町5丁目の町人たちがあめ市のみこし行列の練り物として制作し、江戸時代後期から昭和時代初期まで使われました。全長5m、高さ4mの大きさを誇るこの豪華な宝船と七福神人形は、松本の町人の繁栄とあめ市の賑わいを象徴しています。新博物館での展示に合わせ、明治時代に再建された宝船本体を修復し、人形と帆の複製品を制作しました。

伝えてきた心

②ワラウマ

ワラで作った馬の背に、貧乏神を憑りつかせた人形が載っています。入山辺地域周辺では、毎年2月8日に皆でこのワラウマを囲み、大きな数珠を回しながら念仏を唱え、最後は「貧乏神追い出せ」と唱えながら運び出し、河原で燃やします。今回、入山辺厩所地区の方々に新たに制作していただいたワラウマを展示します。



開かれた盆地

③白骨温泉の石灰華

北アルプス乗鞍岳の東山腹に湧き出る白骨温泉は、日本でも屈指の人気を誇る秘湯です。湧き出たばかりのお湯は無色透明ですが、次第に白い微粒子（炭酸カルシウム）が生成され乳白色に変化します。石灰華は炭酸カルシウムが湧出口などで沈殿して形成されたものです。こちらは、「白骨温泉の噴湯丘と球状石灰石」という名称で国の天然記念物に指定されています。本資料は展示用資料として、特別な許可を得て白骨温泉で採取したものです。



 **生きる力**

▶④蒸気ポンプ

蒸気ので放水する移動式の消火用ポンプです。明治45年(1912)に発生した被害家屋1,341軒、死者5人の大火を受け、市民の期待を背負い松本市街地に配備されました。それまでの手押しポンプを圧倒する力強い放水は人々を驚かせ、市街の近隣地域にも出動しました。休館中に補修を行い、かつての輝きを取り戻しました。



 **城のあるまち**

▲⑤寛永通宝松本銭の枝銭

枝銭とは、鑄型から取り出した直後の未加工状態の貨幣です。江戸時代、寛永通宝の鑄造は、全国でも限られた場所だけで行われる業務でした。流通しない未完成品の存在は、松本に銭座があったことを示します。

 **変わりゆく社会**

▼⑥明治十三年六月御巡幸松本御通図

明治13年(1880)に明治天皇が松本をご巡幸された様子を描いた錦絵です。新博物館近くの千歳橋が中心に描かれており、松本市街地の文明開化の様子を窺うことができます。



 **城のあるまち**

◀⑦松竹梅と桐紋蒔絵の女乗物

松本藩主戸田家に嫁いだ奥方の婚礼調度品です。漆塗りの本体に蒔絵の松竹梅や桐紋を散らし、飾り金具を打っています。この豪華なつくりには、江戸時代の大名家の格式や威厳が感じられます。展示にともない、修復・クリーニングを行いました。

(松本市立博物館 学芸員/吉澤 せり子)

イギリス時計産業の発展とマリンクロノメーターの発明

はじめに

700年以上にわたる機械式時計の歴史において、1657年という年は大きな転換点になりました。調時機構（時計の針が一定の速さで、規則正しく動くように調整する機構）として、置き時計や掛け時計に振り子が用いられるようになり、装飾を重視する時計の時代から高精度な時計を製作する時代に変化したのです。この頃を境に、時計産業の主役に躍り出たのがイギリスで、およそ1世紀の間、世界の時計産業を牽引しました。

本論では、イギリスで製作された主な時計を取り上げ、時計産業が発展した経緯を追っていくとともに、世界の国々がより高精度な時計を製作するきっかけの一つとなった、マリンクロノメーターの発明について触れます。

イギリス時計産業の発展

トーマス・トンピオン、その弟子のジョージ・グラハムといった卓越した時計師の誕生を契機に、イギリス時計産業は1680年頃から急速な発展を遂げ、世界で最も進んだ地位を獲得しました。これは、1700年代以前に、世界で初めて、振り子時計や懐中時計を標準的な形として製作したことが大きな理由だと推測されます。本章では、イギリス時計産業発展期の主な時計を紹介します。

(1) ランタンクロック (17世紀初頭～18世紀中頃)



ランタンクロック/イギリス/19世紀



和時計/日本/江戸中期

イギリス時計産業初期から製作され、当時の最も標準的な時計だったのが、ランタンクロックです。その名のとおり、ランタンのような形をしており、動力はおもり式で、機械式時計の中でも初期の時計だと考えられます。現存最古のランタンクロックは、1620年頃にイギリス人のウィリアム・ポイヤーによって製作されたものです。ちなみに、江戸時代の日本で製作された和時計の多くが、ランタンクロック

に似た形をしているのは、舶来品のランタンクロックをモデルに和時計を製作したためだと思われます。振り子時計が商品化されてからも製作され続け、18世紀中頃まで、特に地方のメーカーを中心に生産されていました。

(2) トラベルクロック (17世紀後半～18世紀後半)

トラベルクロックは、その名のとおり、旅行先で使用することができる持ち運びに便利な時計です。一方で、当時のトラベルクロックは旅行用といっても、直径が約7.5cm～13cm程度あり、持ち運ぶのに便利だったとは言えない部分もあります。その起源は馬車用の大型懐中時計であったため、上部に環が取り付けられ、ホテルの部屋や馬車のコーチ内で引っ掛けられるようにしてありました。通常はケースの外周を固い皮で覆い、保護していたとされています。形は戦後以降に日本で販売されているトラベル時計と異なるものの、電球や電話が発明される以前の旅行では、暗がりでも時間が分かり、列車や馬車に遅れないように目覚める必要があったので、アラーム機能やリピータ機能も付いていました。トラベルクロックは、形を変えて現在まで愛されている時計といえます。

(3) ブラケットクロック (17世紀中頃～18世紀中頃)

ブラケットクロックは、ブラケットと呼ばれる置台の上に置いて使用された時計です。長方形の黒無地、切妻型屋根のケースに時計機械が収まっているものが主流でした。

(4) 壁掛けクロック (17世紀後半～)

壁掛け時計は色々な形やデザインのものが多く、一点一点手作業で時計を製作した時計師の心意気を感じられます。

(5) ロングケースクロック (17世紀後半～18世紀後半)

時計を動かす大型のおもりを保護するために発明されたと言われているのが、ロングケースクロックです。ロングケースクロックの中でも、高さ2m程度のケースに収まる時計は、グランドファーザークロックと愛称されるようになりました。一般的に、大きさ故にそのように愛称されるようになったと言われますが、18世紀後半の時計師が祖父の代から大切にされていたロングケースクロックをグランドファーザークロックと呼ぶようになったとか、イギリスで作曲された歌に取り上げられたとか、経緯には諸説あります。



グランドファーザークロック 左:フランス/19世紀 右:イギリス/18世紀

(6) 懐中時計 (17世紀後半～)

現存最古の懐中時計は、1625年頃に製作されたものです。ジョン・ミッドナルという時計師の作で、イギリスの政治家オリバー・クロムウェルが使用したと考えられます。懐中時計にヒゲゼンマイ（携帯時計用の小さなゼンマイ）を用い、精度が飛躍的に向上したのは1675年と言われますが、意外にも、置き時計や掛け時計に振り子が用いられるようになった1657年からわずか20年弱しか経過していません。懐中時計は、正確な時間を示す時計としての実用性の他に、一種の装飾品として愛されていました。よって、文字盤やケースに施されたエナメル加工、多種多様な鍵や鎖等、美術品としても魅力があります。19世紀以降の時計産業は、機械化・量産化が可能になったことで、技術を持った時計職人の手作業による生産が少なくなってしまいましたが、懐中時計を見ると、時計職人の個性が感じられます。

マリクロノメーターの発明

本章では、時計産業史の発展に多大なる影響を及ぼしたマリクロノメーター（マリン時計、船舶時計とも呼ぶ。以下、マリクロノメーターとする。）を紹介します。大航海時代の幕開け以降、世界各国の船乗りたちが世界を冒険するようになりました。大航海時代以前の13世紀頃に、方位を把握するための羅針盤、続いて17世紀初頭に、緯度を測定するための道具である六分儀が発明されましたが、正確な方位や緯度を把握できても、正確な経度が分からなければ、今の自分たちの居場所を把握できず、海難事故に繋がりました。そのため、安全な航海には、正確な経度を測定するこ

とが必要であり、その測定には、海上でも正確な時間を示す時計の発明が不可欠でした。航海の安全性向上を目指して発明されたのが、船の揺れや温度変化の影響を受けにくい高精度な時計であるマリクロノメーターです。特に、17世紀のイギリスは、世界の中でも海難事故が多かったため、正確なマリクロノメーターを発明し、経度誤差の基準を満たした者には懸賞金を与えるという施策を取りました。イギリス人の大工ジョン・ハリソンとフランス人時計師のピエール・ル・ロワは、18世紀に発明の先駆者として名を揚げ、その後、イギリス人ジョン・アーノルドとトーマス・アンショウが廉価で大量生産した製品が、多くの人命を海難事故から救うこととなりました。

おわりに

前述のとおり、マリクロノメーターは船の運命を左右するため、とりわけ高精度に製作されました。その発明によって、時計の精度が向上したという点を見れば、時計産業の発展に多大な影響を与えたと言っても過言ではありません。19世紀以降には、多くの国々で製造されるようになり、時計産業の枠を超えて、近現代の世界の航海を支え続けました。



マリクロノメーター/イギリス/19世紀

(松本市時計博物館 学芸員/小林 駿)

参考文献

- 大西平三訳『図説時計大鑑』（雄山閣、1980年）
- 黒川義昌『時計百科事典』（精密工業新聞社、1983年）
- 塚田泰三郎・本田親蔵『新装改訂版 古時計 西洋と日本』（東峰書房、1989年）
- 有澤隆『図説時計の歴史』（河出書房新社、2006年）
- 松本市時計博物館『世界の古時計』（精美堂印刷、2002年）

企画展「今昔はかり展」身体をはかる

今年の今昔はかり展では、「自分の身体」をはかる私たちに最も身近な「はかり」をご紹介します。

はかり資料館のモノトーンな資料の中に、ひときわ目を引くオレンジ色の体重計があります。平成元年(1989)・久保田鉄工株式会社(現 株式会社クボタ)製で、「オレンジボール」という名を持つヘルスレコーダーです。体重計に乗り、身長・性別などの情報を入れると、その人の最適体重などが紙で出てきます。料金は10円、50円、100円のいずれかを設定でき(料金式でなくても可)、大浴場を持つ旅館だけでなく、遊園地など様々な施設に設置されました。体重をチェックして健康づくりに役立てる意識の高まりを感じます。

現代では「一家に一台」が当たり前と感じられる体重計ですが、以前は体重を家ではかることはほとんどありませんでした。体重の測定は、銭湯で風呂上りに大きな体重計を使う時代を経て、浴室のある家の増加に伴い、現在の多機能ヘルスマーターへと移り変わっていきました。

さて、健康診断で体重とともに内緒にしておきたいのが、座高ではないでしょうか。現在、座高を測定する座高計は学校健康診断検査項目の見直しにより無くなり、その存在を知らない方も増えつつあります。座高計の経験者の多くは「座高測定が健康にどう役にたったの



オレンジボール

だろう」という疑問を持っているのではないのでしょうか。

本企画展では、体重計や座高計の他にも「身体をはかる」資料を展示します。懐かしさや疑問も感じる「はかり」をぜひご覧ください。

(松本市はかり資料館 学芸員/遠山 順子)

企画展『今昔はかり展』

[会 期] 10月28日(土)~12月26日(火)

[会 場] 松本市はかり資料館

[料 金] 通常観覧料(高校生以上200円・中学生以下無料)

ガイドコーナー はんでんぼく

※申込み・問合せは各館へお電話ください

展示スケジュール

詳細はホームページへ! <https://www.matsu-haku.com/>

館名称	10月	11月	12月
松本市はかり資料館		■企画展『今昔はかり展』 10/28(土)~12/26(火)	
窪田空穂記念館	■開館30周年記念 コーナー展示『窪田空穂記念館 30年のあゆみ』 10/7(土)~2024/2/25(日)		

※料金は通常観覧料 ※月曜休館(休日の場合は翌平日)

松本市立博物館から ☎0263-32-0133

講演会「啓蒙する松本博覧会」

日 時 10月14日(土) 午後1時30分~3時
会 場 松本市立博物館 講堂
料 金 無料
定 員 80人(申し込み方法は松本市立博物館ホームページでお知らせします)
講 師 塩原佳典氏/新潟大学教育学部准教授
料 金 無料
問合せ 松本市立博物館まで

窪田空穂記念館から ☎0263-48-3440

開館30周年記念 コーナー展示 『窪田空穂記念館 30年のあゆみ』

窪田空穂記念館は本年度で開館30周年を迎えました。節目の年を迎え、開館から今日までの記念館のあゆみを当時の資料とともに振り返ります。
会 期 10月7日(土)~令和6年2月25日(日)
※月曜日休館(月曜日が祝日の場合は翌日休館)、12月~2月は平日休館(土日祝のみ開館)年末年始休館
会 場 窪田空穂記念館
料 金 通常観覧料(高校生以上310円・中学生以下無料)
問合せ 窪田空穂記念館まで

旧山辺学校校舎から ☎0263-32-7602

しめ縄作り教室

日 時 12月3日(日) 午前9時~正午
会 場 旧山辺学校校舎内
料 金 通常観覧料(高校生以上200円・中学生以下無料)
定 員 30人(要予約・先着順)
対 象 どなたでも(小学校3年生以下の児童は保護者同伴)
講 師 荒田直氏、ほか3人
持 物 はさみ、飲み物(必要な方)
申込み 11月18日(土)午前9時から電話で旧山辺学校校舎へ

あとがき

新博物館の開館まで残すところ1か月をきりました。特別展や常設展のほかにも、皆様をお迎えする準備が着々と進められています。明治39年(1906)に前身の「明治三十七、八年戦役記念館」が開館して以降、松本の市民とともに歩み続けてきた松本市立博物館。その再スタートをぜひ見届けてください。(松本市立博物館 吉澤せり子)

あなたと博物館 No.245

発行年月日/令和5年(2023)9月15日
編集・発行/松本市立博物館
〒390-0873 松本市丸の内4番1号 Tel.0263-32-0133
新住所: 〒390-0874 松本市大手三丁目2番21号
URL: <https://www.matsu-haku.com/>
e-mail: mcmuse@city.matsumoto.lg.jp
印刷 川越印刷株式会社



松本市立博物館
Matsumoto City Museum